2．研究の詳細

プロジェクト名	高大連携家庭科「保育」映像教材の開発		
プロジェクト期間	平成25年5月～平成27年3月31日		
申請代表者 (所属講座等)	甲斐　純子 (家政教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	豊田　晴一 (家政教育講座)

(1)研究目的

近年、育児放棄や暴力による虐待、待機児童などの問題子育てに関する様々な問題が取り上げられている。その背景には核家族化や女性の社会進出の増加から、子育てを保育施設に頼らざるを得ない現状がある。本来、子どもの発達には親との深い愛着形成が必要不可欠であるといわれている。しかし、仕事への早期復帰をせざるを得ない、または希望する親が増加し、平成23年待機児童数のうち82.6%が未満児である[2)]という調査結果も発表されている。子どもを守る砦としての家庭が揺るいでいる時代に、子育てに関する教育は一層重要となっている。わが国の学校教育における「子育て」の教育は、戦前は「家事科」の「育児」が、戦後は中学校・高等学校「家庭科」の「保育」が担ってきた。現在も、中学校では「幼児の発達」と「生活の世話」を、高等学校では、胎児の成長や乳幼児の様々な発達について、親とのかかわりの重要性及び子育て支援についてなど、子どもを生み育てるための基本的な知識と技術を取り扱っている。しかし、高等学校「家庭科」は単位数が減少し、その中で「保育」の内容が削減されつつある。一方で、中学校、高等学校「保育」において「保育体験実習」が必修となった。授業時間減の中で、中、高校生に直接的、間接的に乳幼児と対面させ、親としての準備教育を充実させることこそ現代の喫緊の教育課題と考える。現実には、保育施設に受け入れ人数の限界があるため、地域の中、高生に直接保育体験を実施することが困難になりつつある。そこで、乳幼児との直接体験を補う保育DVD教材を作成し、「保育」の授業に用いることによって高校生の乳幼児についての知識や子育てに対する意識にどのような変化がみられるか、地元高等学校と連携し検討を行った。

(2)研究方法

1)研究対象

福岡県立M高等学校	2年A組（実験群）	男子14名 女子23名 計37名	2年B組（比較群）	男子11名 女子17名 計30名

2)研究期間

①保育DVD教材の作成　　2013年　6月～10月

②実験授業 及び分析　　2013年10月～12月

3)研究方法

社会福祉法人F保育園において保育園児の1日の生活を撮影し、保育DVD教材を作成した。上記2年A組の家庭科保育授業において使用し、その効果を検討した。また、保育授業の前後でアンケート調査を行い、実験群と比較群の比較を行った。

① 保育DVDの作成

・保育園において各年齢の保育園児の1日を撮影した。

・保育園で撮影した映像のうち、家庭科の指導項目となっている、基本的生活習慣の「食事」、「着

脱」、「睡眠」と、「身体の発達」及び「遊び」について、それぞれ 1 から 6 歳までの年齢ごとに 1 分程度にまとめ、授業中に必要な部分だけを見ることができるよう編集した。

・上記高校の 2 年 A 組の「保育」授業（8 時間中 3 時間目）において使用した。

②福岡県立 M 高等学校の保育授業の流れと研究手順

(実験群：2 年 A 組)　　(比較群：2 年 B 組)

授業の流れ	研究手順	授業の流れ
1.性教育 2.保育授業①	事前アンケート	1.性教育 2.保育授業①
3.保育授業② 4.保育授業③	ビデオの視聴	3.保育授業② 4.保育授業③
5.保育授業④ 6.保育授業⑤	GT の解説	5.保育授業④ 6.保育授業⑤
7.保育授業⑥ 8.保育授業⑦	グループ討議 事後アンケート	7.保育授業⑥　グループ討議 8.保育授業⑦

事前アンケートから、両群の、「保育学習に関する予備知識」と「子育てに対する意識」について、　事後アンケートから、「保育授業後の理解度（身体の発達，社会性の発達，言葉の発達)」と「子育てに対する意識の変化」について、得点化し比較した。

4)評価基準

①事前アンケートについて

アンケート項目	評価基準
問 5－①②③ 乳幼児の発達について	正解　2 点 ±1 歳　1 点 不正解　0 点 合計 6 点

②事後アンケート

問 1－① ・出生時の体重は約 3,000g　・出生時の身長は約 50cm ・生後 1 年で体重が出生時の 3 倍　・生後 1 年で身長が出生時の 1.5 倍 ・首が座る　・寝返る　・座る　・はいはい　・つかまり立ち ・つたいあるき　・一人で歩く　・片足で立つ　・スキップができる ・指を開く　・手を伸ばす　・握る　・つかむ　・つまむ ・頭部から臀部へ　・中心部から末端部へ　・粗大運動から微細運動へ ・歯の発達　・大泉門　・小泉門 1 つにつき 1 点　合計 24 点
問 1－② ・探索期　・反抗期　・体の接触や感覚を揺さぶられる遊び ・一人遊び　・傍観遊び　・模倣遊び　・みたて、つもり遊び ・並行遊び　・ぶつかり合いやけんか　・ごっこ遊び　・ゲーム遊び

・集団遊び　・基本的生活習慣　・食事　・排せつ　・衣服の着脱 ・清潔　・睡眠　・挨拶ができる　・順番を守る　・ルールを守る ・思いやり　・協調性　・共有物を大切にする　・社会的生活習慣 ・家族とのかかわり　・人見知り　・友達とのかかわり 1つにつき1点　合計28点
問1－③ ・泣いて伝える　・周囲の人の言動を真似しながら覚えていく ・喃語　・一語文　・二語文　・三語文　・単語　・文章 1つにつき1点　合計8点

上記の「身体の発達について」「社会性の発達について」「言葉の発達について」に関して、M高等学校の家庭科の教科書に記載されている用語や家庭科教諭が授業中に説明した事柄を記述したものを正答とした。

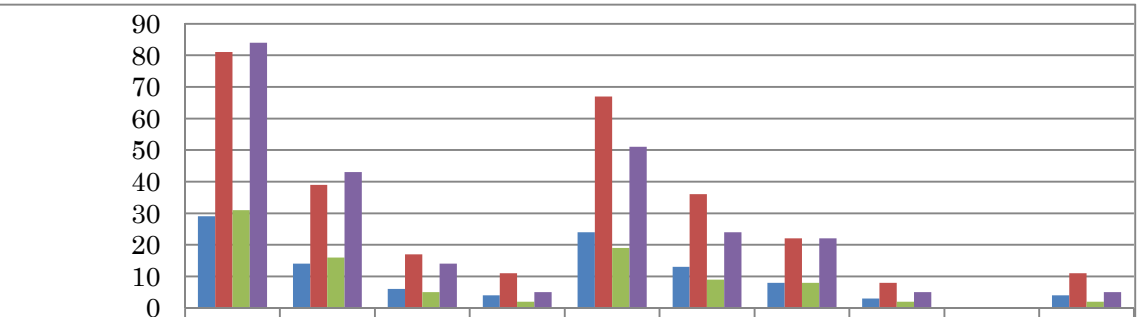
（3）結果と考察

1）　事前アンケートの結果と考察

(1)　乳幼児に対するイメージについて

「小さい子ども(0～5歳児)に対してどの様なイメージを持っていますか。」に関して、図1の通りであった。乳幼児に対するイメージは実験群、比較群ともに「かわいい」「元気」などのプラスイメージが大きく、「うるさい」「面倒くさい」などのマイナスイメージは小さいことが分かった。

また、その他の回答には「いつも笑顔」「なんでも口に入れる」「たまに困る」「どう接したらいいかわからない」などがあげられた。



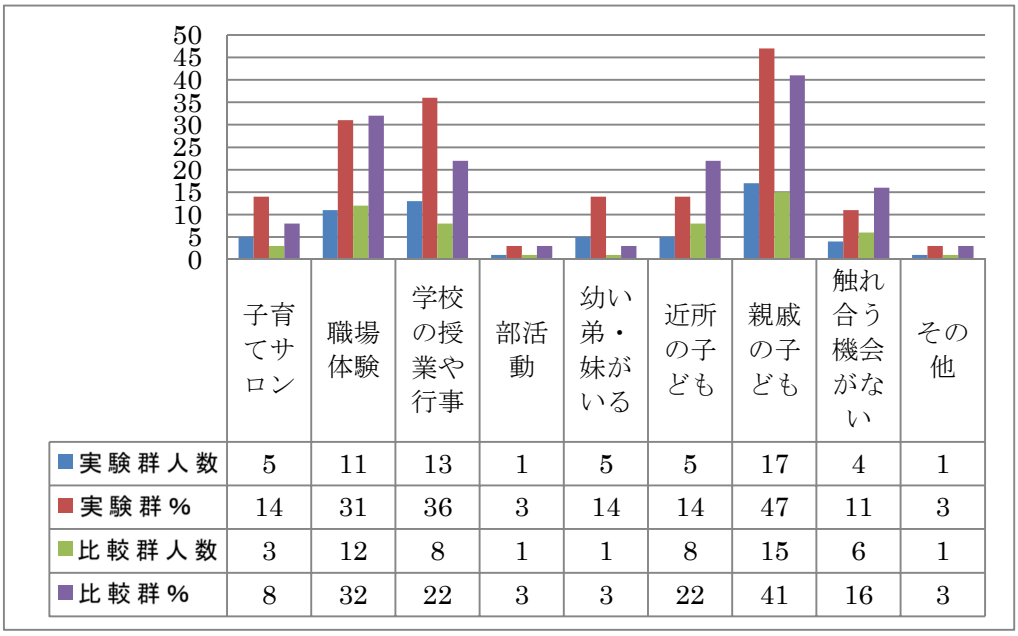
	かわいい	小さい	よく泣く	おもしろい	元気	温かい気持ちになる	うるさい	面倒くさい	かわいくない	その他
実験群人数	29	14	6	4	24	13	8	3	0	4
実験群%	81	39	17	11	67	36	22	8	0	11
比較群人数	31	16	5	2	19	9	8	2	0	2
比較群%	84	43	14	5	51	24	22	5	0	5

図1　高校生の乳幼児に対するイメージ

(2)乳幼児との触れ合い経験について

子どもと触れ合う機会が今までにあったか、中学生の時の触れ合い経験について、「中学生の時期に

小さな子ども(0～5 歳児)と触れ合う機会がありましたか。」に関して、図 2 の通りであった。



	子育てサロン	職場体験	学校の授業や行事	部活動	幼い弟・妹がいる	近所の子ども	親戚の子ども	触れ合う機会がない	その他
実験群人数	5	11	13	1	5	5	17	4	1
実験群%	14	31	36	3	14	14	47	11	3
比較群人数	3	12	8	1	1	8	15	6	1
比較群%	8	32	22	3	3	22	41	16	3

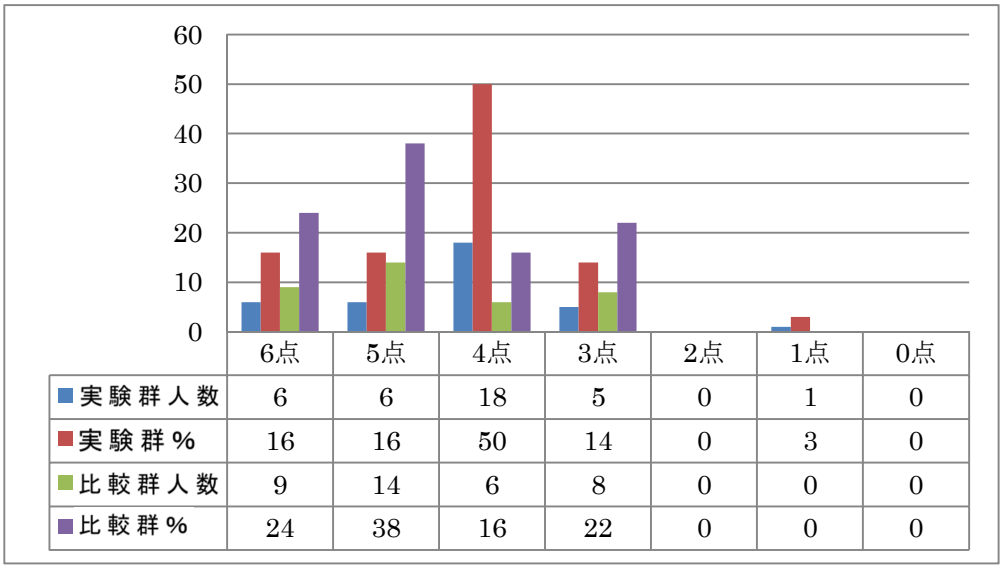
図 2　高校生の乳幼児との触れ合い経験

乳幼児との触れ合い経験に関しては、親戚の子どもがもっとも多いという結果となった。次いで「職場体験」「学校の授業や行事」が半数の生徒が回答していること、触れ合う機会が無かったと回答している生徒が見られた事から、学校で乳幼児との関わりを持たせる取り組みが重要であると考える。

また、その他には「家が保育園と幼稚園を経営している」などがあげられた。

(3)乳幼児の発達に関する予備知識について

乳幼児の発達においてどの程度予備知識があるか調べるために、①基本的生活習慣のうち、食事について 3 歳児のお箸を使って食べているようす②基本的生活習慣のうち、衣服の着脱について 4 歳児のボタンの開閉のようす③言葉の発達について、1 歳児の「あけて」「嫌だ」と一語文を発するようすの 3 つの動画を見せ、それぞれ何歳児の発達か回答させた。なお、③の言葉の発達に関しては、教科書内で 1～2 歳の発達とされていたことから、2 歳児という回答でも正答とした。



	6点	5点	4点	3点	2点	1点	0点
実験群人数	6	6	18	5	0	1	0
実験群%	16	16	50	14	0	3	0
比較群人数	9	14	6	8	0	0	0
比較群%	24	38	16	22	0	0	0

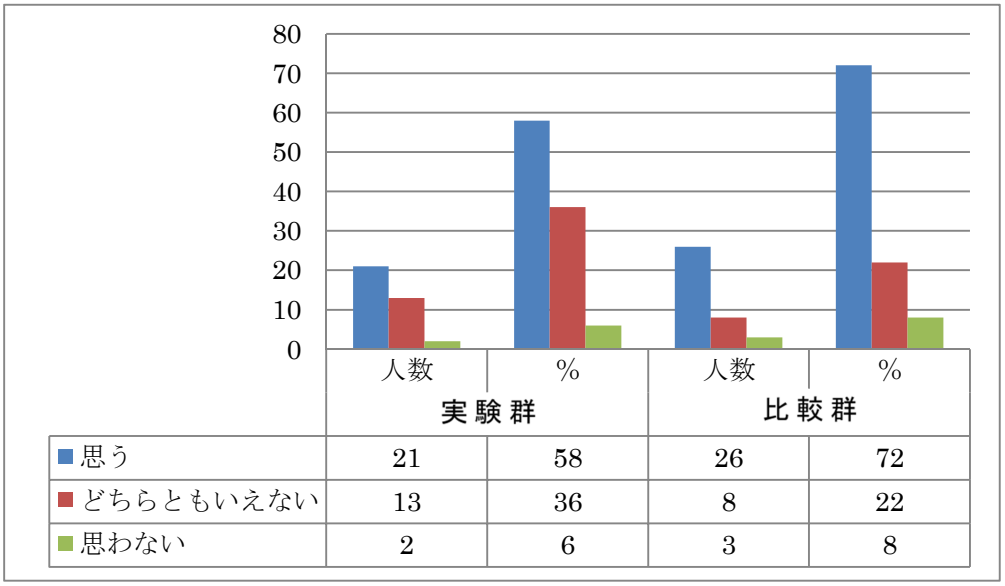
図 3　高校生の乳幼児に対する予備知識

結果を実験群と比較群に分けて点数ごとに集計したものを図 3 に示した。

実験群の平均点は 4.3 点、比較群の平均点は 4.6 点であり、大きな差は見られなかった。

(4)子育てに対する意識について

「将来自分の子を生み育ててみたいか。」について高校生の意識について図 4 に示した。また、子育てに対する肯定的な意見として、「可愛いから」、「親の気持ちを知りたいと思うから」、「子どもが好きだから」、「子どもがいた方が楽しそうだから」、また、否定的な意見として、「よくわからない」、「育てる自信がない」等が両群から共通にあげられていた。子育てに関して実験群も比較群も、子どもに対してはプラスイメージが大きいが、毎日の生活の世話や、乳幼児期の反抗期に難しさを感じている生徒もいた。また、一方で、自分の将来計画に子どもを育てることがイメージできない生徒や、中には、「いい母親になれない。」、「自分で稼いだお金を自分の好きなことか、親孝行に使いたい。」「そもそも結婚しようと思わない。」「子どもが好きではない。」など、子育てや家庭を築くことを消極的、否定的に捉えている生徒もみられた。



	実験群		比較群	
	人数	%	人数	%
思う	21	58	26	72
どちらともいえない	13	36	8	22
思わない	2	6	3	8

図 4　高校生の子育てに対する意識

2）　事後アンケートの結果と考察

アンケート項目

1　乳幼児の発達についての定着度

2　親の役割をどう捉えているか

3　現代社会の子育ての問題についてと、それを踏まえた高校生自身の将来設計

授業終了後に、上記の項目を基に、アンケート調査を行った。

さらに、項目の一つ目に関しては、以下の 3 項目に分けて調査を行った。

①　身体の発達について

②　社会性の発達について

③　言葉の発達について

まず、高校生が授業後に乳幼児の発達についてどの程度理解しているかについて検討した。将来子どもを生み育てる際、目の前で成長していく我が子の発達を適切に援助するために、乳幼児の発達について、順序を含め理解しておくことは重要である。したがって発達を大きく分けた身体・社会性・言葉の

3 項目を設定し、全ての項目を記述式での回答とした。また、視覚教材を用いて各発達段階の映像を見ることが、定着率にどう影響するかを調べるために、本項目を設定した。

次に、子育ての第一義的責任は親が担う親の役割の中で、重要だと思うものを 4 つ上げさせ、高校生が親の役割をどの様なものと捉えたかを調査した。

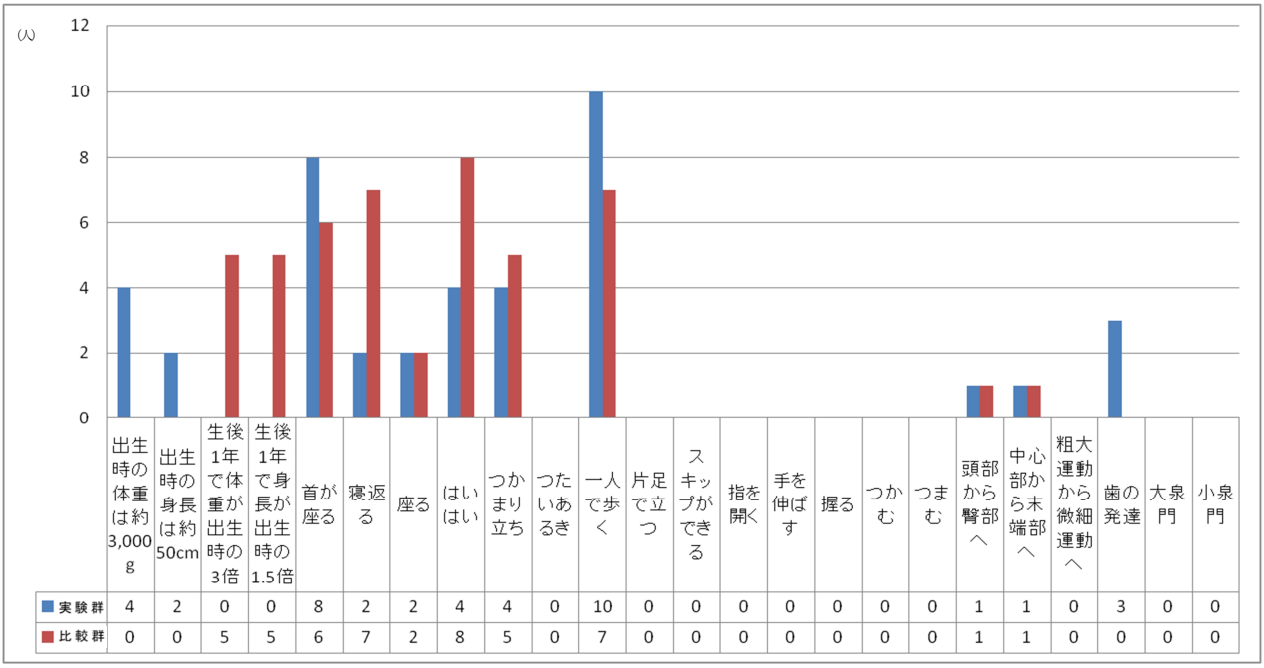
三つ目の項目では、現代社会における子育てに関する問題をあげさせ、それを踏まえたうえで、授業で学習した子育てに関する制度や支援、子どもとの関わりなどから将来どの様な子育てをしようと考えるのかを調査した。

事後アンケート調査の結果は以下の通りである。

(1)乳幼児の発達について

① 身体の発達について

各項目の回答数を図に示した。また、得点項目としていないが、乳幼児の身体の発達である物を、保育授業以外の経験による知識として図 5 に示した。



	出生時の体重は約3,000g	出生時の身長は約50cm	生後1年で体重が出生時の3倍	生後1年で身長が出生時の1.5倍	首が座る	寝返る	座る	はいはい	つかまり立ち	つたいあるき	一人で歩く	片足で立つ	スキップができる	指を開く	手を伸ばす	握る	つかむ	つまむ	頭部から臀部へ	中心部から末端へ	粗大運動から微細運動へ	歯の発達	大泉門	小泉門
実験群	4	2	0	0	8	2	2	4	4	0	10	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	3	0	0
比較群	0	0	5	5	6	7	2	8	5	0	7	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0

図 5　乳幼児の身体の発達について高校生の知識

乳幼児の身体の発達について、実験群の平均点 1.2 点、比較群の平均点は 1.2 点と点数差は見られなかった。

回答が見られた項目はすべて家庭科教諭が口頭で説明を加えたものであり、口頭解説が無いものに関してはほとんど回答されなかった。

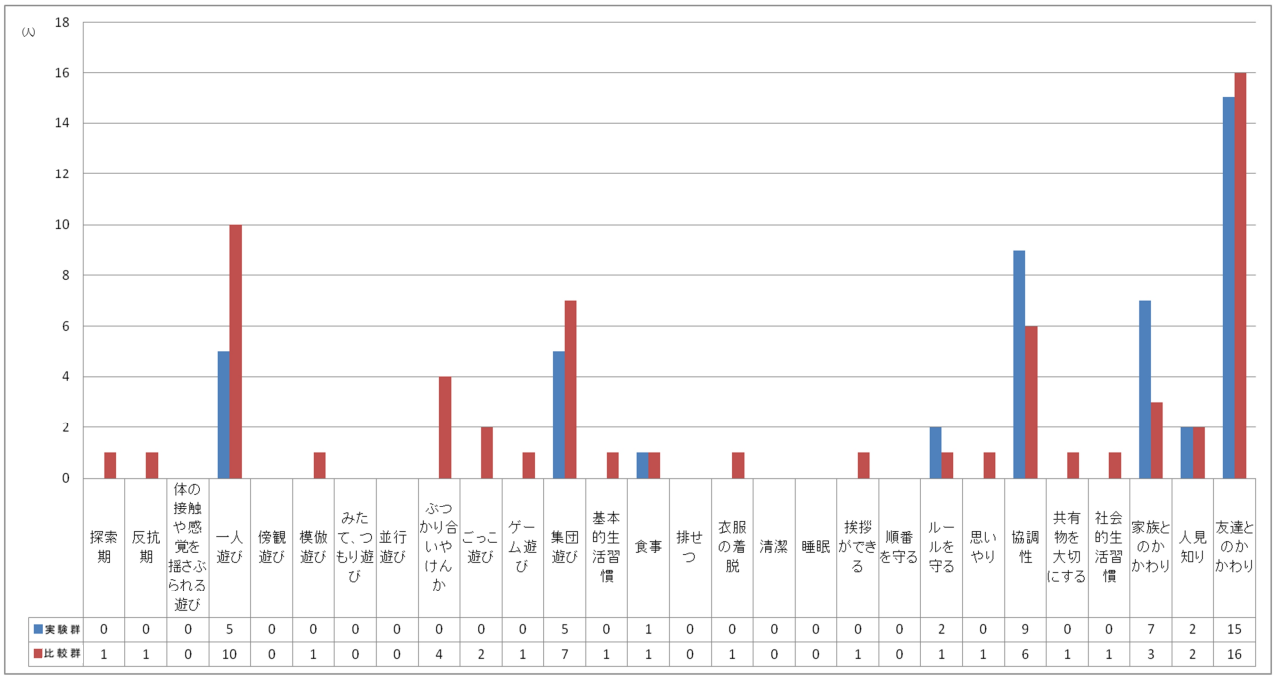
実験群の生徒の回答のうち、「首が座る」「一人で歩く」が多く回答されていた。これは、授業中に教諭が口頭で「首が座る事によって発達が始まる。首がしっかり座らないとその先の発達が進まない。」と指導していたためではないかと考える。また「一人歩き」に関して、実験授業において保育 DVD 教材を視聴させ、生徒の反応の良さから 3 回繰り返し視聴している。そのため、他の運動機能の発達よりも印象に残りやすかったのではないかと考える。比較群においては、運動機能の発達が「座る」を除いて順番通りに記述できている生徒が多かった。

実験群では「身長伸びる」「体重が増える」「急激に成長する」など、文章で回答する生徒が少なく、具体的な説明がない回答が多く見られ得点につながらなかった。しかし、経験による知識を書

いており、身体の発達には分類されていないが、乳幼児が育っていく中で身体に起こる様々な変化を知る機会があったためと考えられる。

比較群では、「みるみる大きくなり、技術面でも目覚ましい進歩を遂げる」や「仲間や離乳食を通して急激に成長する」など、文章で回答する生徒が多いが、具体的に説明するには至っていないものがみられた。また、「1 年で身長と体重が 3 倍になる」や「0 歳～3 歳までに生まれた時の倍になる」など、数値が間違っているものが多く見られ、得点につながらなかった。同群では経験による回答はみられなかった。

② 社会性の発達について



	探索期	反抗期	体の接触や感覚を揺さぶられる遊び	一人遊び	傍観遊び	模倣遊び	みたて、つもり遊び	並行遊び	ぶつかり合いやけんか	ごっこ遊び	ゲーム遊び	集団遊び	基本的生活習慣	食事	排せつ	衣服の着脱	清潔	睡眠	挨拶ができる	順番を守る	ルールを守る	思いやり	協調性	共有物を大切にする	社会的生活習慣	家族とのかかわり	人見知り	友達とのかかわり
実験群	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5	0	1	0	0	0	0	0	0	2	0	9	0	0	7	2	15
比較群	1	1	0	10	0	1	0	0	4	2	1	7	1	1	0	1	0	0	1	0	1	1	6	1	1	3	2	16

図 6　乳幼児の社会性の発達についての高校生の知識

社会性の発達について、実験群は平均点 1.2 点、比較群は 1.6 点であり、大きな差は見られなかった。

実験群と比較群どちらも「友達とのかかわり」を通して社会性を発達させてゆくと回答している生徒が多かった。また遊びに関しては、「一人遊び」から「集団遊び」ができるようになると回答している生徒が見られたが、遊びの種類に関してはほとんど回答されなかった。基本的生活習慣に関しては、ほとんどの生徒に回答が見られなかった。

「友達とのかかわり」がもっとも多く回答されたことに関して、基本的生活習慣、遊びの発達ともに、友達とのかかわりを重要な要素として含んでおり、教科書や家庭科教諭の説明によく聞く部分であることが要因ではないかと考える。また、高校生が今まで同じ年代の友達の中で色々なことを感じ、成長していっている最中である事を考えると、高校生にとってもっとも理解しやすい項目であると考えられる。

遊びに関しては、遊びの種類を大きく分けると一人遊びと集団遊びであり、これは高校生にもイメージしやすい。しかし、傍観遊び、並行遊び、共同遊びなどといった遊びは、教科書に語句としてしか記載されていなかった。これらは、実際に遊んでいるところを観察しないと理解しにくいので、回答できなかったと考える。

基本的生活習慣は、①身体の発達についての中で、「基本的生活習慣を身に付けることで発達す

る。」や、③の言葉の発達での中で、「基本的生活習慣を身に付けていく中で言葉が増える。」との回答があった。このことから高校生は、基本的生活習慣が身に付くことと、社会性の発達が身に付くことが結びついていないと考えられる。

③ 言葉の発達について

言葉の発達について、実験群は平均点 1.0 点、比較群は 1.3 点であり、大きな差はなかった。

言葉の発達については、他の発達段階に比べ、教科書の記載事項や、家庭科教諭の口頭説明から比較的イメージしやすいと考えられる。したがって、高校生の回答にも、ほとんどの生徒が具体的に説明することができていた。しかし、言葉の発達の流れを「一語文」などの用語を使って説明することができている生徒は少数であり、ほとんどの生徒の回答は「最初はママ、パパなどの簡単な単語を話し、だんだんとしゃべれるようになる。」や、「最初は泣き声→一文字でしゃべる→少ない単語を話す→大まかに言葉をしゃべる→言葉としてちゃんと伝える。」のような回答であった。

高校生の回答の中で、言葉の発達に関して、喃語は「意味のない言葉」、一語文は「単語」、二語文・三語文は「話せる単語が増える」と表現する生徒が多く見られた。しかし、喃語は自分の欲求を伝えているため意味があり、一語文は、たとえば、筆者のボランティア先の一歳児では、筆者に対し、おもちゃを指さしながら「ママ」(あれ取って)や、行きたい方角を繰り返し見つめながら「ママ」(あっちに行きたい)など欲求を一語で伝えるものである。それが二語文三語文になると「ママ、とって」「ママ、あっち、行く」となり、明確に意思を伝えることができるようになるのが言葉の発達である。

（4）まとめと今後の課題

高校生は、子どもに対しては肯定的なイメージを持っているため、保育学習に関する興味・関心は高かった。しかし、乳幼児と関わる機会は極めて少なく、遊ぶ機会はあっても、乳幼児の発達の様子を見る機会、乳幼児の世話をする機会は殆どないことがわかった。保育授業においては、直接体験、実習が多く印象に残っていた。高等学校の「保育」では将来の子育てに必要な実践力を多く学習するため、直接体験や実習を多く取り入れる事が重要であると考える。

子育てに対して、多くの生徒が生んで育てたいと回答したことから、子育てに対して意欲的であることが分かった。しかし、そのほとんどは「可愛い」「楽しそう」など乳幼児を雰囲気で捉え、実践力に結びつくような具体的なイメージは持っていない生徒が多く見られた。高等学校の家庭科において、子どもを生み育てる意義を学習し、子どもの発達段階理解したうえでの適切な援助ができるようになるためには、乳幼児の発達についてしっかりと理解し、子育てに対して具体的な科学的な知識に支えられた子育て実践力を養成する必要がある。今回、実験群と比較群の間に多くの差は認められなかった。今回の研究では，DVD の内容検討画中心となったが，今後、「保育 DVD 教材」を用いることにより、乳幼児に接する経験の乏しい高校生たちが、乳幼児の身体の発達や言葉の発達の年齢ごとの具体的イメージを持てるような授業への取り入れ方についてさらに追究していきたいと考える。

（※添付の作成した保育 DVD は、福岡県教育センター、県立 M 高等学校及び F 保育園等に寄贈した。）

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。
○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。